

レビ記を学ぶ (1)

塩野和夫

第I部 献げ物の規定 (レビ記1章～7章)

第一章 小さき献げ物 レビ記2章

1 足を止めて

(1) レビ記の位置

レビ記は出エジプト記と民数記の間に置かれている。ところで、レビ記のこの位置は自明のことではない。内容的には民数記が出エジプト記に続いているからである。

エジプトを出立したイスラエルはシナイ山までやってきた。出エジプト記は「シナイ山で十戒を与えられたイスラエルが神の幕屋を作った」と記している。その後シナイ山から神の約束の地カナンまでの旅を記しているのが民数記である。したがって、旅路の行程からすると出エジプト記から民数記に続いている。

ところが、何故か出エジプト記と民数記の間にレビ記が入って連続性を中断している。シナイ山からカナンまでの旅路を描けばよさそうなのに、レビ記によって立ち止まらせている。何故なのか。

レビ記は印象の薄い書物に違いない。「レビ記を読んだ」人はいても、その内容が頭の中にしっかりと記憶されることはない。ところが、聖書は違う。出エジプト記から民数記に進めばよかった。しかし、連続性を断ち切っても、レビ記を間に入れている。重要な内容が記されているからである。

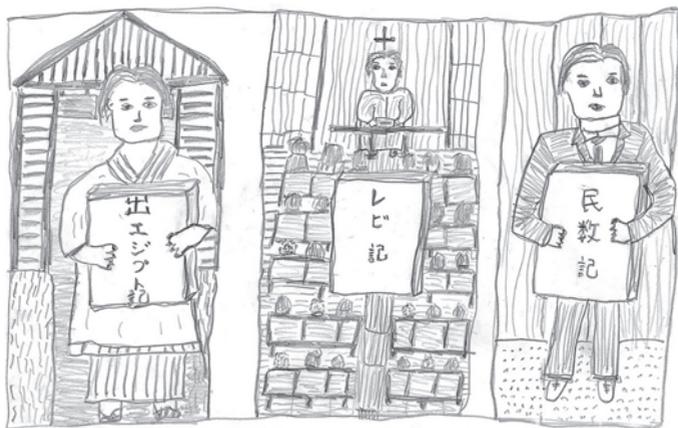
(2) レビ記の関心

書名について簡単に説明しておきたい。イスラエルには祭儀を司るレビ人がいた。レビ記という名称はレビ人との関連を想像させる。しかし、両者に関わりはない。レビ記にはわずかししかレビ人に関する記述がなく、それらは重要な部分でもない。

ヘブル語聖書はこの書を「そして、彼は呼び」と名付けていた。一番初めに記されている言葉からである。ところで、バビロン捕囚後にヘブル語聖書はギリシャ語訳聖書（「70人訳聖書」と呼ばれている）に翻訳される。「レビ記」とは70人訳聖書が付けた名称である。それ以来、ラテン語訳聖書・英語訳聖書でも「レビ記」が用いられ、今日に至っている。

何がレビ記に記されているのか。連続性を中断してまで立ち止まらせたもの、それは何であったのか。レビ記の関心は一貫して祭儀（現在でいえば「礼拝」）あるいは祭儀に加えられる者の生活態度にある。

したがって、レビ記から学ぶのは礼拝についてである。礼拝とは何であり、礼拝に臨む者は何を求められているのか。ただし、キリスト者には「イエス・キリストの福音を通して学ぶ」大前提がある。だから、レビ記から学ぶ際にも細かな規定に束縛されるのではなく、礼拝に対する精神性を学ぶ。



レビ記 — 立ち止まって、礼拝 —

(3) 第1部 「献げ物の規定」(1～7章)の構成

レビ記第1部「献げ物の規定」の構成を見ておこう。まず、「3種類の献げ物」(1～3章)について記している。

1. 「焼き尽くす献げ物」について 1章
2. 「穀物の献げ物」について 2章
3. 「和解の献げ物」について 3章

次いで、「贖罪の献げ物」(4～5章)に関してである。

4. 「贖罪の献げ物」について 4～5章
 - (ア) 不注意な罪の場合(4章)
 - (イ) 罪を故意に隠した場合(5章1～13節)
 - (ウ) 咎を犯した場合(5章14～26節)

さらに、献げ物に対する「祭司と信徒への指示」(6章～7章36節)である。

5. 祭司への指示 6章1～30節
6. 祭司と信徒への指示 7章1～21節
7. 信徒への雑多な指示 7章22～36節

最後に「結びの言葉」(7章37～38節)がある。

8. 結びの言葉 7章37～38節

2 穀物の献げ物

(1) レビ記2章「穀物の献げ物」の構成

レビ記2章を学ぶにあたって、表1「レビ記2章 穀物の献げ物」により構成を見ておきたい。テキストの学びに資するためである。レビ記2章は4つの部分に分けられる。「(1)麦粉の供え物」「(2)パンの供え物」「(3)補足1」「(4)補足2」である。さらに「(3)補足1」を除いて3要素がある。「①信徒への指示」「②祭司の務め」「③結び」である。

表1 「レビ記2章 穀物の献げ物」

	(1) 麦粉の供え物 2章1～3節	(2) パンの供え物 2章4～10節	(3) 補足1 2章11～13節	(4) 補足2 2章14～16節
① 信徒への指示	穀物の献げ物を主にささげるときは、上等の小麦粉を献げ物としなさい。奉納者がそれにオリーブ油を注ぎ、更に乳香を載せ、アロンの子らである祭司たちのもとに持って行くと、 (1～2a)	献げ物をかまどで焼いて穀物の献げ物とする場合は、酵母を使わずに、オリーブ油を混ぜて焼いた上等の小麦粉の輪形のパンか、オリーブ油を塗った酵母を入れない薄焼きパンとする。 (中略) こうして作った穀物の献げ物を主のもとに携えて行き、祭司に手渡すと、 (4～8a)	主にささげる穀物の献げ物はすべて、酵母を入れて作ってはならない。酵母や蜜のたぐいは一切、燃やして主にささげる物として煙にしてはならないからである。それらのものは、初物の献げ物として主にささげてもよいが、宥めの香りとして祭壇にささげてはならない。穀物の献げ物にはすべて塩をかける。あなたの神との契約の塩を献げ物から絶やすな。献げ物にはすべて塩をかけてささげよ。 (11～13)	初穂の献げ物を主にささげる場合は、麦の初穂を火で炒ってひき割りにしたものを初穂の献げ物としてささげよ。それにオリーブ油を注ぎ乳香を加える。これが穀物の献げ物である。 (14～15)
② 祭司の務め	祭司の一人がその中からオリーブ油のかかった上等の小麦粉一つかみと乳香全部を取り、しるしとして祭壇で燃やして煙にする。 (2b)	祭司はそれを祭壇に供える。祭司はこの穀物の献げ物から一部を取り分け、しるしとして祭壇で燃やして煙にする。 (8b～9a)	祭司はオリーブ油のかかったひき割り麦の一部と乳香全部を、しるしとして燃やして煙にする。 (16a)	
③ 結び	これが燃やして主にささげる宥めの香りである。穀物の献げ物の残りはアロンとその子らのものである。これは、燃やして主にささげられたものの一部であるから、神聖なものである。 (2c～3)	これが燃やして主にささげる宥めの香りである。穀物の献げ物の残りはアロンとその子らのものである。これは、燃やして主にささげられたものの一部であるから、神聖なものである。 (9b～10)	これが燃やして主にささげる物である。 (16b)	

(2) 献げ物の種類

ここでレビ記第1部(1～7章)に出てくる献げ物について説明しておく。

- ア) 焼き尽くす献げ物 焼き尽くす献げ物は「燔祭」とも言われる。燔祭の原語は「上って行く」である。動物を焼くと良い香りが「立ち上る」。それが「燔祭」の原像である。焼き尽くす献げ物の特色は「すべてを神に捧げること」である。捧げる際に人は動物の頭に手を置く。それがしるしとされた。
- イ) 穀物の献げ物 穀物の献げ物は「素祭」とも言われる。素祭の原語は「贈り物」である。穀物の献げ物の特色は細やかさにある。鳥にも手の及ばない人は一握りの穀物の献げ物で、高価な牛や羊・ヤギ、あるいは鳥の献げ物と同様に認められた。
- ウ) 和解の献げ物 和解の献げ物は「酬恩祭」と言われ、平和の献げ物、共食の献げ物とも呼ばれる。特色は神との交わりへの感謝にある。一部は神に供えられ、一部は祭司に、一部が奉納者に与えられた。
- エ) 贖罪の献げ物 贖罪の献げ物は「罪祭」とも言われた。神との契約関係が人の犯した罪のために損なわれる。この関係を回復するために捧げられるのが贖罪の献げ物である。
- オ) 賠償の献げ物 賠償の献げ物は「愆祭」とも言われる。神との契約関係が人に対して犯した咎のために損なわれる。この関係を回復するために捧げられるのが賠償の献げ物である。

(3) 「穀物の献げ物」への指示

表1「レビ記2章 穀物の献げ物」の「(1)麦粉の供え物」,「(2)パンの供え物」,「(3)補足1」,「(4)補足2」を順々に縦に見ていく。そうすると、レビ記2章に記されている通りに読める。それに対して、3つの項目「①信徒への指示」,「②祭司の務め」,「③結び」を順々に横に読む。そうすると、共通する内容ごとに読める。その際、「(3)補足1」は主として「信徒への指示」を記している。ここでは、横に読むことによってレビ記2章の内容を分析したい。

まず、「①信徒への指示」である。穀物の献げ物に関係する品名として取り上げられているのは麦粉・パン・塩・初穂である。禁止事項として「酵母と蜜」を捧げる際の注意が記されている。これらを捧げるための準備事項も記している。とりわけ塩は

「すべて塩をかけてささげる」ことが指示されている。これらの準備を整えたうえで、祭司のもとへ運ぶのである。

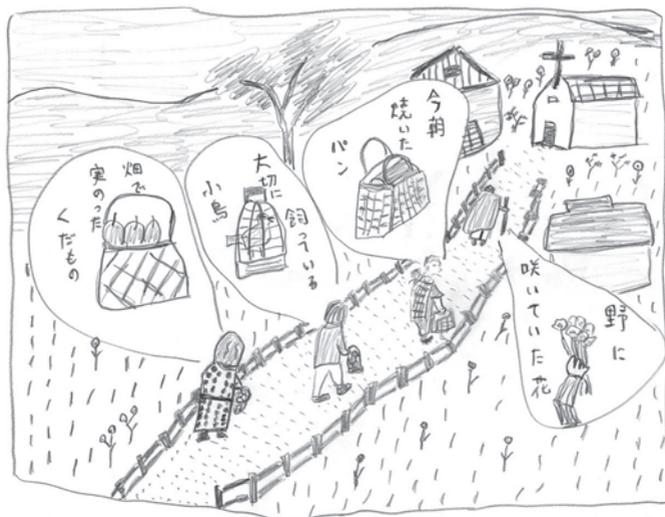
次いで、「②祭司の務め」である。祭司は穀物の献げ物の一部をしるしとして祭壇の上で焼く。そうすることによって奉納者が神に覚えられる。乳香はすべて焼かれる。良い香りはただ神にのみ捧げられるためである。

最後に、「③結び」である。香ばしい香りは主に喜ばれる。残った穀物の献げ物はすべて祭司のものとされる。これら一切の行為は神によって聖とされている。

(4) 「貧しくて手が届かない場合」の規定（5章11～13節）

犯した罪の代償として、通常は「雌羊または雌山羊」が贖罪の献げ物として定められている（5章6節）。しかし、貧しくて手が届かない場合に「二羽の山鳩または二羽の家鳩」が贖罪の献げ物とされる（5章7節）。貧しくてそれにも手が届かない場合は、「小麦粉十分の一エファ」が贖罪の献げ物とされる（5章11節）。

小麦粉十分の一エファとは手のひらにのるわずかな量で、一日のパンに相当するとも考えられている。「二羽の山鳩または二羽の家鳩」の規定が貧しい人たちのため



それぞれに祈りを込めた献げ物

あれば、「小麦粉十分の一エファ」はきわめて貧しい人たちのためである。したがって、これらの規定は贖罪の献げ物がすべての人に開かれている現実を示している。つまり、一人として贖罪の恵みから漏れることがあってはならないのである。

レビ記5章の規定によれば、神は通常の人々の献げ物も貧しい人の献げ物も極めて貧しい人の献げ物も同様に贖罪の献げ物として受け入れられる。見方を変えて言えば、神の目に重要なのは献げ物の量ではなくそれに込められた贖罪への祈りに違いない。

このように、レビ記2章が記す穀物の献げ物は5章の規定によって新たな展開を示している。

3 神の求めを聞く

(1) 献げ物の根拠

レビ記2章を中心に穀物の献げ物について学んできた。まとめておきたい。

まず、献げ物の根拠である。穀物の献げ物について人々は細心の配慮をしたうえで、丁寧に規則を設けている。このような規則や配慮に学ぶことも必要であろう。けれども、なぜここまで配慮し細かな規則を定めたのか見落としてはならない。

つまり、人々が「神は何を求めておられるのか」を探求していた事実である。罪の赦しを与えるために、神は贖罪の献げ物を求められた。だから、人々は「神の求めが何であるのか」を聞きながら、当時としてふさわしい規定を設けた。

したがって、罪を犯した者が神へと立ち帰るために献げ物を求められた。これが根拠である。3,000年前も今も献げ物を求められる根拠に変化はない。

(2) 祈りを込める

穀物の献げ物から第2に献げ物の祈りを学ぶ。

穀物の献げ物は小さな捧げ物であった。この事実から「神への献げ物は小さくても良い」とされるのではない。そうではなく「どんなに貧しい人であっても神への献げ物から排除されることはない」のである。どのような人であっても神の前にふさわしく生活できるために、それぞれの人に合った献げ物があった。穀物の献げ物はその典型である。

しかも、神は雌羊または雌山羊であっても、二羽の山鳩または二羽の家鳩であっても、小麦粉十分の一エファであっても同じように受け止めて下さる。そこにおける問

題はただ一つ、献げ物に込められている祈りである。繰り返し、「しるし」とある。神に献げられるしるしにふさわしく注がれるのは人々の祈りである。

祈りを込める。穀物の献げ物から第2に学ぶ真実はこの祈りに違いない。

(3) 献げる喜び

穀物の献げ物を捧げると良い香りが天に上っていく。

「良い香り」、それは神が喜んで献げ物を受け入れて下さっているしるしである。だから、乳香はすべて焼かなければならなかった。人々が祈りを込めた献げ物は大小にかかわらずそのすべてを神は受け入れて下さる。よい香りがそれを保証した。

そこで、人々には良い香りを理由として「神は献げ物を受け入れて下さった」、「神は献げ物のゆえに罪を赦してくださった」と信じる事が許されていた。

ここに献げ物を介した神と人との関係の回復があり、捧げる喜びがある。

4 覚えましょう

- (1) 祭司はこの穀物の献げ物から一部を取り分け、しるしとして祭壇で焼いて煙にする。 レビ記2章

穀物の献げ物から一部を取り分け、しるしとして祭壇で焼かれ煙が立ち上っていく。神は煙の中に良い香りを嗅ぎ取り、祈りを受けとめて下さる。この真実を信じ、喜び、人々は献げ物をした。これは私たちにとって礼拝であり、献金に通じる。

- (2) 貧しくて二羽の山鳩にも二羽の家鳩にも手が届かない場合は、犯した罪のために献げ物として小麦粉十分の一エファを携えて行き、贖罪の献げ物とする。

レビ記5章

神はすべての人に贖罪の献げ物を求められる。罪の赦しを必要としない人は一人としていないからである。そこで神は誰にでも開かれた犠牲を示された。それが小麦粉十分の一エファの献げ物である。どんなに小さな献げ物であっても祈りを込めて捧げれば、神は受け入れて下さる。

第二章 贖罪の献げ物 レビ記4章

1 贖罪への関心

(1) 「贖罪の献げ物」の規定

レビ記4章と5章は「贖罪の献げ物」の規定だけを扱う。この箇所扱っているのはただ一つ「罪を犯したならば」という事例だけである。この事実から「レビ記は贖罪の献げ物に関して多くを割いている」と言える。そこでなぜ、「罪を犯したならば」というケースに対しては詳細な規定を必要としたのかが問われる。

学者によると、「罪の自覚の深まり」が「贖罪の献げ物」規定を詳しくした。神に対して罪を犯しても、「それほど気にならなければ、贖罪規定は簡単であった」。ところが、「神の前に罪を犯すことがいかに重大で決定的なことであるのか」と気づくほどに、「贖罪の規定は詳細になった」。

罪とは「的外れ」を意味する。神に対して的外れを外して生きている人間に向けて、「罪の状態にある」と指摘される。的外れはまた神との契約から外れてしまっている現実を意味する。聖書によると、「神と私が結んだ契約」に信仰者の原点はある。神は契約に従って恵みを施し、信仰者は契約に従って神の民として生きる。

ところが、罪は信仰者を神との契約から外してしまう。イスラエルは罪を犯し、神との契約から外れていく悲惨さを何度も経験した。繰り返した経験の中で真剣に求めたのが、「神との契約関係に復帰させる力」である。

そこで知らされた第1の真実は、神の赦しへの意志と力である。人間の側には何をもってしても契約の回復はありえない。しかし、神には「ふさわしくない者を受け入れ、赦そうとする意志と力がある」と知らされた。そこで第2に、「贖罪の献げ物」の規定が赦しの神に向けて定められた。

(2) 「贖罪の献げ物」の特色

「贖罪の献げ物」の特色を見ておきたい。

まず、贖罪の献げ物の規定は「罪の赦し」のために定められている。レビ記1～3章は犠牲の方法を記していた。すなわち、焼き尽くす献げ物・穀物の献げ物・和解の献げ物である。それに対して、贖罪の献げ物は方法ではなく、「罪の赦し」という目的のためだけの捧げ物である。

第2に贖罪には最も高価な犠牲が求められていた。典型的な事例は「祭司の場合の雄の全き子牛」である。雄の全き子牛は最も高価であったとされる。ただし、基本的な原則に「もし手の届かない場合」という例外規定が定められている。これは贖罪がすべての人に開かれている事実を示している。

第3に贖罪の献げ物に込められる「罪の赦しを求める祈り」についてである。たとえ知らないで犯した罪であっても、「赦してください」という祈りを込めて贖罪の献げ物は捧げられた。

(3) 罪と恥

ここで罪と恥について比較しておきたい。「日本人にはキリスト教のいう罪が分かりにくい」と言われる。確かにそのような一面があって、「日本人一般に罪の意識が弱い」。あるいは「日本は恥の文化だ」という指摘があって、よく言い当てていると思われる。そこで概観的に罪と恥の文化の比較を人間の生き方において見ておきたい。

恥の文化、すなわち「恥ずかしい」という自意識が向ける対象は人の目である。人間を超えた存在を意識しないわけではない。しかし、判断基準となるのは一義的に人の目である。人の目に映る自己が最大の関心事となっている。だから、恥意識が強いほどに人の目を気にして行動する。

罪意識は神の目を意識した生き方を導く。人の目を気にしないわけではない。けれども、最終的には神に対して的外れになっていない道を歩もうと意識する。この判断基準は他者の目には見えない。だから、罪を意識する人は結局のところ他者の目に映る自分を問題とはしない。ただ、神の恵みの内を歩もうとする。

「日本は恥の文化だ」とすると、罪と取り組むうえで誘惑の多い国に違いない。神の目ではなく、人の目に映る恥が気になるからである。道を外しても、「人の目にさえ映らなければいいのではないか」という内なる語りかけが強いからである。

表2 「レビ記4章 贖罪の献げ物」

	(1)祭司の贖罪 (3～12節)	(2)共同体の贖罪 (13～21節)	(3)代表者の贖罪 (22～26節)	(4)一般人の贖罪1 (27～31節)	(5)一般人の贖罪2 (32～35節)
①罪を犯したならば	油注がれた祭司が罪を犯したために、責めが民に及んだ場合には、自分の犯した罪のために、贖罪の献げ物として無傷の若い雄牛を主にささげる。まず牛を臨在の幕屋の入り口に引いて行き、主の御前に立ち、その頭に手を置き、主の御前で牛を屠る。(3～4)	イスラエルの共同体全体が過ちを犯した場合、そのことが会衆の目にあらわにならなくても、禁じられている主の戒めを一つでも破って責めを負い、その違反の罪に気づいたときは、会衆は若い雄牛を贖罪の献げ物としてささげ、それを臨在の幕屋の前に引いて行く。共同体の長老たちは主の御前に立って牛の頭に手を置き主の御前でその牛を屠る。(13～15)	共同体の代表者が罪を犯し、誤って、禁じられている主なる神の戒めを一つでも破って責めを負い、犯した罪に気づいたときは、献げ物として無傷の雄山羊を引いて行き、その頭に手を置き、主の御前にある焼き尽くす献げ物を屠る場所です。これが贖罪の献げ物である。(22～24)	一般人のどれかが誤って罪を犯し、禁じられている主の戒めを一つでも破って責めを負い、犯した罪に気づいたときは、献げ物として無傷の雌山羊を引いて行き、献げ物の頭に手を置き、焼き尽くす献げ物を屠る場所です。これが贖罪の献げ物である。(27～29)	羊を贖罪の献げ物とする場合は、無傷の雌羊を引いて行く。奉納者が献げ物の頭に手を置き、焼き尽くす献げ物を屠る場所です。これが贖罪の献げ物として屠ると、(32～33)
②祭司の務め1	油注がれた祭司は牛の血を取って臨在の幕屋に携えて入り、指を血に浸して、聖なる垂れ幕の前で主の御前に七度血を振りまく。次に、血を臨在の幕屋の中にある香をたく祭壇の四隅の角に塗る。残りの血は、全部臨在の幕屋の入り口にある焼き尽くす献げ物の祭壇の基に流す。(5～7)	油注がれた祭司は牛の血を取って、臨在の幕屋に携えて入り、指を血に浸し、垂れ幕の前で主の御前に七度血を振りまく。次に、血を臨在の幕屋の中の主の御前にある祭壇の四隅の角に塗り、残りの血は全部、臨在の幕屋の入り口にある焼き尽くす献げ物の祭壇の基に流す。(16～18)	祭司は献げ物とする雄山羊の血を指につけて、焼き尽くす献げ物の祭壇の四隅の角に塗り、残りの血はその祭壇の基に流す。(25)	祭司はその血を指につけて、焼き尽くす献げ物の祭壇の四隅の角に塗り、残りの血は全部、祭壇の基に流す。(30)	祭司は献げ物の血を指につけて、焼き尽くす献げ物の祭壇の四隅の角に塗り、残りの血は全部、祭壇の基に流す。(34)

表2 つ づ き

	(1) 祭司の贖罪 (3～12節)	(2) 共同体の贖罪 (13～21節)	(3) 代表者の贖罪 (22～26節)	(4) 一般人の贖罪 1 (27～31節)	(5) 一般人の贖罪 2 (32～35節)
③ 祭司の務め 2	その後、献げ物とする牛から脂肪を全部切り取る。内臓を覆っている脂肪、内臓に付着するすべての脂肪、二つの腎臓とそれに付着する腰のあたりの脂肪、および腎臓と共に切り取った肝臓の尾状葉を、和解の献げ物の牛の場合と同じようにして切り取って、焼き尽くす献げ物の祭壇で燃やして煙にする。 (8～10)	脂肪はすべて切り取って、祭壇で燃やして煙にする。方法は祭司の贖罪の献げ物の雄牛の場合と同じである。 (19～20a)	脂肪はすべて和解の献げ物の脂肪の場合と同じように、祭壇で燃やして煙にする。 (26a)	奉納者は和解の献げ物から脂肪を切り取ったように、雌山羊の脂肪をすべて切り取る。祭司は主を宥める香りとしてそれを焼いて祭壇で燃やして煙にする。 (31a)	奉納者は和解の献げ物の羊から脂肪を切り取ったように、脂肪を全部切り取る。祭司はそれを祭壇で、燃やして主に献げる物に載せ、燃やして煙にする。 (35a)
④ 罪の赦し	雄牛の皮、肉、頭、四肢、内臓、胃の中身は、ことごとく宿営の外、清い場所である焼却場に運び出し、燃える薪の上で焼き捨てる。これは焼却場で焼き捨てられねばならない。 (11～12)	祭司がこうして罪を贖う儀式を行うと、彼らの罪は赦される。雄牛の残骸は宿営の外に運び出して、さきの祭司の雄牛の場合と同じ仕方で焼却する。これが会衆の贖罪の献げ物である。 (20b～21)	祭司がこうして彼のために罪を贖う儀式を行うと、彼の罪は赦される。 (26b)	祭司がこうして彼のために罪を贖う儀式を行うと、彼の罪は赦される。 (31b)	祭司がこうして彼の犯した罪を贖う儀式を行うと、彼の罪は赦される。 (35b)

(2) 頭に手を置き

まず、表2「レビ記4章 贖罪の献げ物」の「①罪を犯したならば」を考察する。

贖罪の献げ物として求められたのは、無傷の若い雄牛(祭司の場合)・若い雄牛(会衆)・無傷の雄山羊(司)・無傷の雌山羊(一般人1)・無傷の雌羊(一般人2)である。奉納者は貴重な犠牲を引いて行き、動物を捧げる直前に頭に手を置く。その時、彼らは祈ったに違いない。厳粛な祈りの場である。

それから犠牲の命が断たれる。その場面を聖書は「屠る」とわずか一言で淡々と記している。共同体の場合、犠牲の頭に手を置き屠るのは長老たちである。この事実は罪の連帯性を暗示している。

連帯性に関して、贖罪の儀式を執行する祭司の場合はどうであろうか。形式的にみれば、儀式において祭司は神と人との間に立つ。しかしながら、祭司が奉納者に対して全き他者として神に向かうのであれば、贖罪の儀式は成立しないのではないか。聖書は神と人との間に立つ人々のとりなしの祈りを多く記している。祭司にも犠牲を捧げる人々との連帯性が求められたに違いない。

屠られた動物は祭司の手に渡される。

(3) 祭司の務め

次いで、「②祭司の務め1」と「③祭司の務め2」の考察である。献げ物を受け取った祭司の務めは二つある。

一つは血に関する儀式である。祭司と共同体の贖罪の場合、祭司はまず聖所の垂れ幕の前で七度血を振りまく。次いでいずれの場合でも、祭壇の四隅の角に血を塗る。最後に残った血のすべてを祭壇の基に流す。それにしてもなぜ繰り返し、血の儀式が続くのか。レビ記17章11節に血に対する当時の考えが記されている。「生き物の命は血の中にあるからである。わたしが血をあなたたちに与えたのは、祭壇の上であなたたちの命の贖いの儀式をするためである。血はその命によって贖いをするのである」。

次いですべての脂肪を切り取って、祭壇で燃やして煙にする。この脂肪に関して、「(3)代表者」「(4)一般人1」「(5)一般人2」の贖罪では「和解の献げ物」と形容されている。「(4)一般人1」の贖罪では「主を宥める香りとして」と説明されている。

(4) 罪の赦し

最後に「④罪の赦し」の考察である。「レビ記4章 贖罪の献げ物」の結びで罪の赦しが記されている。

「(2)共同体」「(3)代表者」「(4)一般人1」「(5)一般人2」の贖罪の儀式では、ほぼ同じ表現を用いて「彼(ら)の罪は赦される」とある。奉納者は贖罪の儀式を通じて罪の赦しを確信して帰途についた。

ただし、なぜか「(1)祭司の贖罪」の儀式には罪の赦しが記されていない。

「(1)祭司」「(2)共同体」の贖罪の儀式では加えて動物の残骸の処置を記している。

3 清められる人間

(1) なぜ、罪なのか

レビ記4章の学びをまとめておきたい。

ここで一貫して問題にされていたのは「罪」である。知らないで犯したとしても、その「罪」が問題であり、だから「罪の赦し」が課題となる。しかし、なぜ「恥」ではなく「罪」なのか。

理由を聖書に求めるならば、きわめて明白である。パウロはコリントの信徒にあてた手紙に記している。

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

コリントの信徒への手紙二 4章16～18節

パウロの指摘によると、「見えるものを気にする」生き方で問題になるのが「外なる人」である。それは一時的であり、過ぎ去るものでもある。恥にこだわる人は結局のところ、「外なる人」に囚われた生き方をしている。

それに対して「見えないものに目を注ぐ」人が重視するのは、日々新たにされる「内なる人」である。そこで問題になるのが「罪」である。

(2) 贖罪 — 赦しへの意志と形式 —

レビ記に「贖罪の献げ物」に関する規定が詳しく記されている。これは何を意味するのか。丁寧な贖罪の規定から語り出されているのは、罪人を赦そうとする神の意志とその力を具体化する形式である。

「神は愛である」と言われる。それは正しいが、具体性を伴っていない。聖書において、神の愛は「罪人を赦し、彼らを生かそうとする」。さらに、この愛に具体的な形の一つを与えているのが「贖罪の献げ物」である。

ところで、「贖罪の献げ物」は形式にすぎないという側面がある。この儀式を支え生かすのは神の意志である。罪人を赦し、救い生かそうとする神の意志が贖罪の儀式を有効にする。そこで、神の恵みに応え感謝して、「贖罪の献げ物」という規定が生まれた。

旧約聖書の時代、多くの人々が「贖罪の献げ物」を通して神の赦しの愛に触れていた。

(3) 主イエスの十字架

キリスト教によると、贖罪の犠牲による儀式は旧約時代の神の赦しの愛の表現であった。それに対して、新約時代においては主イエスの十字架が新しく完全な神の赦しの愛の実証である。

よく知られている通り、十字架は贖罪の規定を前提にしている。最後の晩餐においてイエスは「これはわたしの体である」(マルコ福音書14章22節)と言われた。この表現には贖罪の犠牲における香ばしい香りを放った脂肪との類比が認められる。「契約の血」(マルコ福音書14章24節)とも言われた。これは贖罪の犠牲における血を前提にしている。

このようにイエスの十字架は贖罪の犠牲の儀式を踏まえながら、新たな展開を示している。それは「イエスは罪なき神の独子である」という信仰に基づく。キリスト教によると、「神は主イエスの十字架を完全な罪の赦しを成立させる出来事」として受け止めて下さった。

だから、「十字架はただ一度人間の罪の贖いのための出来事」と理解されている。

(4) 清められる人間

かつてイスラエルでは繰り返し贖罪の犠牲が捧げられた。それに対して主イエスの十字架はただ一度である。ただし、十字架の死を記念する聖餐式は繰り返し執行されている。

ところで、キリスト教会では「聖餐式に預かる」という。なぜ、「参加する」のではなく、「預かる」なのか。

聖書によると、「清め」は本来的に神の行為である。だから、人は神が行われる清めの儀式に預かることによつてのみ清められる。

神の清めの儀式に預かることによつて、心も目も行為も清められる。

4 覚えましょう

- (1) 油注がれた祭司が罪を犯したために、責めが民に及んだ場合には、自分の犯した罪のために、贖罪の献げ物として無傷の若い雄牛を主にささげる。

レビ記 4 章

祭司はその務めによつて神と人との間に立つ。だから、祭司の犯した罪は「責めが民に及ぶ」とされた。罪の連帯性である。そこで、祭司の贖罪には最も高価な犠牲が求められている。

- (2) 祭司がこうして彼の犯した罪を贖う儀式を行うと、彼の罪は赦される。

レビ記 4 章

贖罪の犠牲を用いた儀式は罪の赦しを得るために規定された。人々は繰り返し贖罪の儀式に預かり、罪を赦された者として生活した。